

日本ピューリタニズム学会

2019 年度 定例研究会

開催日時：11月9日（土）15:30–17:30

場所：青山学院大学 間島記念館三階 集会室 BC

発表者：石川敬史（帝京大学）

タイトル：「啓蒙知識人としてのジョン・アダムズのユニテリアニズムと世俗政府」

司会：増井志津代（上智大学）

〈報告要旨〉

アレクシ・ド・トクヴィルが『アメリカのデモクラシー』の中で指摘しているように、植民地時代のアメリカは、ヨーロッパと比較して宗教と世俗秩序の葛藤が小さかった。しかし、アメリカ独立革命は、アメリカ独自の文脈とはいえ、その担い手は世俗的な人々出会ったし、独立後の各州、そしてアメリカ合衆国憲法体制においては、制度としての「政教分離」が自覚的に目指されたのは確かである。

初期アメリカ研究における政教分離原則の研究は、南部についてはジェファソンによるヴァージニア信教自由法の諸研究、ニューイングランドについては、デイヴィッド・D・ホール『改革をめざすピューリタン』（彩流社、2012年）、大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』（彩流社、1997年）、大西直樹・千葉眞編『歴史の中の政教分離—英米におけるその起源と展開』（彩流社、2006年）をはじめとして優れた研究が数多く存在する。

以上の先行研究を踏まえ、本報告では、これまであまり触れられることのなかった、ジョン・アダムズの政治と宗教について検討し、専門家の見解をうかがう機会としたい。アダムズがユニテリアンであったことは、比較的良く知られているが、アダムズにおけるユニテリアニズムはいかなるものであったのかについては、彼がもつばら政治史の文脈で検討されてきたために、人々の関心を惹くことは少なかった。

アダムズは、30歳の時の論考『教会法と封建法について』の中で、アメリカに移住したイングランド人を「ニュートン氏とロック氏の教えを受け入れたピューリタン」としていた。彼における宗教と啓蒙主義思想の相克に対する回答が、ユニテリアニズムであったと考えるべきだろう。

神学という巨大な学理体系におけるユニテリアニズムを論じることは報告者の手には余るが、18世紀の北アメリカ植民地における知識人にとってのユニテリアニズムについての一考察を報告者が専門として研究してきたジョン・アダムズを通して検討してみたいと考えている。